

# 生徒へのゆさぶりを活用した社会科授業の試み

－歴史的分野「鎖国」の授業を事例として－

社会科 小栗 英樹

## 1 はじめに

社会科の授業をより魅力的にするためにはどうしたらよいか。本校では、学ぶ楽しさを実感できる社会科授業改善の視点として次の4点をあげている※1。

- ・導入時の工夫
- ・生徒の既存の知識や価値観へのゆさぶり
- ・生徒にとって魅力ある学習活動の展開
- ・生徒にとって魅力ある教材の活用

歴史的分野では、上記の視点から次のような授業が考えられる。

- ・実物や複製品などの具体的史料を活用した授業

例 火縄銃や五匁の揭示、五人組帳、地券等を使った授業。

県立博物館で貸し出している大鎧や十二単を使った授業

上記「生徒にとって魅力ある学習活動の展開」と関連するが、フィールドワークを取り入れた授業

- ・身近な地域の歴史的事象や歴史遺産を活用した授業

例 宇都宮氏と宇都宮弘安式条を活用した授業

- ・歴史上の人物を中心に構成した授業

例 坂本龍馬を通して幕末の日本を考える授業

本稿では「生徒の既得の知識へのゆさぶり」を通して学ぶ楽しさを実感できる授業に迫りたい。まず、生徒の既得の知識にゆさぶりをかけるとはどのようなことか、どうすればゆさぶりがかけられるのかを述べ、次に具体的な指導計画を提案したい。さらに、授業後の生徒へのアンケートと生徒作品から授業を分析し、指導計画の有効性について検証する。

## 2 ゆさぶり

### (1) ゆさぶりのとらえ方と学ぶ楽しさの関係

意外性のある教材や、生徒の心情や社会的事象の当事者の心情に迫る教材の提示によって生徒の学習意欲を喚起しようとする場合に、「ゆさぶり」と呼ばれることが多い。

1で述べたように、本校では、「知識に対するゆさぶり」「価値観に対するゆさぶり」を授業改善のための視点としているが、ここでは既得の知識に対するゆさぶりについて述べたい。

小原友行は、社会科学学習のあり方として、学習者の社会認識形成の心理に注目して授業を構成することを提案したが、その中で、生徒の社会認識形成について三つの仮説を立てている。そのうちの一つとして、「ある発達段階にある児童・生徒は、適度な難しさのある問題や経験が与えられると、今まで持っていた認識を新しい認識に作り変える必要がで

てきて、新しい学習が生まれ、それが発達につながる」と述べている※<sup>2</sup>。また、岩田一彦は、社会科における知的好奇心喚起の方法の一つとして次のように述べている。「それまでの体験に基づく情報や、学習の結果得た情報を覆す情報が提示されれば、『なぜ』といった強い知的好奇心を喚起することができる※<sup>3</sup>」。

これらは生徒の既得の知識へのゆさぶりを分かりやすく説明している。生徒の既得の知識へのゆさぶりは「学びなおし」と言い換えることができる。生徒が、生活経験やマスコミ情報、社会科学習で獲得した、社会的事象を説明する知識は不完全なものである。そこで、この知識では説明できない社会的事象を提示する（＝生徒の既得の知識にゆさぶりをかける）。これまでに獲得した知識を一度打ち砕くのである。これによって生徒は学びなおしの必要を感じる。つまり学習に対する動機が生まれる。さらに、学びなおしの結果、説明できなかった社会的事象を説明できる知識を獲得すると、生徒は「新しい事実を知った」と感じ、学ぶ楽しさを実感できると考える。なぜなら、実態調査から、本校生徒は新しい知識を獲得することに社会科学習の楽しさを最も実感しているからである※<sup>4</sup>。一方、新たに獲得した知識は、以前より深まりのある（＝以前より説明できる範囲の広い、応用のきく）知識となる。

すなわち、生徒の既得の知識へのゆさぶりによって、知識獲得欲のある生徒に対して学習意欲、とくに追究意欲を喚起することができる。さらに、追究の結果得た新しい知識は生徒に学習に対する満足感を与えられるのである。

## （2）「ゆさぶり」に必要なこと ―生徒の学習状況を正確に把握すること―

ゆさぶりをかけるためには生徒が学習対象をどこまで知っているのかを正確に把握することが不可欠である。学習対象について何を知らないのかを事前の実態調査から明らかにしなければならない。個々の歴史事象を知っているか否かだけでなく、学習対象をどう理解しているかを把握する必要がある。例えば、後述の「鎖国」の事例では、事前調査で、鎖国時代の交易と交流に関する知識を尋ねるとともに、鎖国のイメージを描かせた。

また、生徒が何を知っているのかを把握することも学ぶ楽しさを実感させる授業を実施するため、有効なゆさぶりをかけるために重要である。竹田清夫は授業に対する関心について次のように述べている。

「関心は『その教科の学習内容への関心』と考えるべきであろう。なおそれゆえ、その教科の『学習内容そのものへの関心』と言っても、厳密に言えば、それは、これから学習しようとしている学習内容そのものへの関心ではない。それは、『それ以前の学習内容』への関心なのである。しかし、その結果、これから学習する『類似の内容』へも関心をもつようになるのである。そこで一般に、関心は、『学習の原動力』であると誤解されてしまうのである。」※<sup>5</sup>

織田信長や戦国時代の授業など、生徒が学習内容についてあらかじめ知識を持っている場合、比較的授業に対する関心が高い。一方、社会史や文化史などの授業は、一般に、授業以前に学習意欲が高まっていないことが多い。これは生徒があらかじめもっている知識の多寡によって学習に対する関心の高さが左右されるためである。竹田の考えによれば、学習意欲を高めるためには、すでに生徒が獲得している知識とのつながりを考慮して授業を構成する必要がある。さらに、生徒が学びなおしを必要とするのは、前にも述べたよう

に、自分の既得の知識では説明できない教材にあたったときである。全く未知の内容から学習を始めることは、とくに社会科の学習意欲が高くない生徒にとって関心を高めることはできないだろう。ゆえに、既得の知識から学習を始めることは、生徒の意欲を高める上で効果的であり、それにゆさぶりをかけることによって、一層授業内容に対する関心が高まっていくのである。

### 3 ゆさぶりを活用した授業構成の例

ここでは、ゆさぶりを活用した授業構成の例として「鎖国」の授業について述べる。

#### (1) 単元構成

単元の学習を通して生徒が学ぶ楽しさを実感できるように、次の点に留意した。

- ①生徒の既得の知識をゆさぶり、知的好奇心を喚起し、楽しく学べる授業とする。
- ②身近な地域の歴史を取り上げ、学習内容に対する関心を高める。
- ③主体的な調べ学習を位置づけ、学習活動を楽しいものにする。
- ④単元を通して「大江戸カルタ」を作成させ、学習に遊びを取り入れる。
- ⑤第1時～第3時（一斉授業）では、授業終了時に「新しい疑問」を考えさせる。

①について。生徒の江戸時代像は、非常に限られた知識による一面的な理解にとどまっている。例えば、「農民は厳しく年貢を取り立てられて苦しい生活をしていた」「鎖国時代は長崎の出島のみでオランダ、清とのみ貿易をしていた」など。そこで、より多面的に歴史事象をとらえさせるためにも、既得の知識をゆさぶる教材を提示し、幅広い知識から江戸時代像を再構築させるとともに、関心を高め、楽しく学べる学習としたい。

②について。身近な地域（宇都宮市、栃木県）の歴史について生徒は十分な知識がない。しかし、鎌倉時代の学習で「宇都宮氏」「宇都宮弘安式条」を学習したところ、大変強い関心を持った。いわゆる中央史と身近な地域の歴史を関連させて学習させることで、学習対象と自分との関わりが明らかとなり、学習意欲を喚起できると考えた。

③について。生徒は主体的に調べ、まとめる活動が好きである。とくに社会科が得意で、関心の高い生徒にその傾向が強い。できる限り時間を確保し、存分に調べ学習をさせる。一方で、社会科が苦手な生徒の多くは教師の分かりやすい説明を望んでいることが以前の実態調査から明らかになった。前半を教師による説明とし、学び方に配慮して指導する。

④について。単元の学習のまとめとしてカルタを活用したのも、楽しく学習させるための工夫である。このカルタは、毎授業後にカルタの読み札候補を書き留めていくものである。学習の成果を遊び心を取り入れてまとめさせたいと考えた。また、このカルタは教師が授業を評価する際や生徒の関心・意欲を評価する際にも有効である。

⑤について。授業の中で新たな疑問を発見でき、自主学習やその後の授業によって疑問が解消できたとき、「わかった」という「学ぶ楽しさ」が生じると考える。また、疑問それ自体、以後の学習で「学ぼうとする力」として作用することが予想できる。すなわち、生徒自身が疑問を発見できるようになることで、教師が疑問を提供していく段階から自らの疑問を解消していく段階へとすすんでいく、と考えた。

資料 小単元指導計画

時	学 習 内 容	指導上の留意点	授業改善の手だてと評価
1	単元の導入  「幕府の大名統制」 幕府は大名をどのように支配したのかな ・既存の知識を生かした復習 ・大名の配置から ・宇都宮藩の場合 ・武家諸法度から	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「単元学習表」「大江戸カルタ記入」を使い、単元の学習を見通させる。</li> <li>・幕府がさまざまな手段で大名を支配していたことを資料の読み取りを通して理解させる。</li> <li>・1時～3時の授業は、教師の思考過程にそって授業を進め、学び方の学習に資するようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・単元を通したテーマ「大江戸カルタを作る」の提示→作品分析</li> <li>・身近な地域の歴史として宇都宮藩を活用する。→観察、作品分析</li> <li>・大名配置の例外を提示して既得知識をゆさぶる。→観察、作品分析</li> <li>・終末に新しい疑問を考えさせる。→作品分析</li> </ul>
2	「鎖国」 朝鮮通信使の学習から鎖国を見直そう ・既存の知識を生かした復習 ・朝鮮通信使について ・「四つの口」の確認	<ul style="list-style-type: none"> <li>・鎖国時代の対外交流として「四つの口」があったことや鎖国した幕府のねらいをしっかりと確認させる。</li> <li>・朝鮮通信使の学習を通して江戸時代の対外交流の具体像を理解させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の鎖国像をゆさぶる。→観察、作品分析</li> <li>・身近な地域の歴史として日光東照宮を活用する。→観察、作品分析</li> <li>・終末に新しい疑問を考えさせる。→作品分析</li> </ul>
3	「身分制度」 江戸時代の身分制度はどれくらい厳しかったのかな ・士農工商の身分制度 ・さらに低い身分の人々	<ul style="list-style-type: none"> <li>・身分制度の厳しい面と緩やかな面の両方を確認させる。</li> <li>・中世以来の賤民観が変質して「さらに低い身分」となり、分断統治に利用されたことを理解させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の身分制度に関する知識をゆさぶる。→観察、作品分析</li> <li>・終末に新しい疑問を考えさせる。→作品分析</li> </ul>
4 5	「知ってるつもり？江戸時代」 課題選択式の調べ学習  課題 ・農民の生活は苦しかった？ ・県内の交通は現在と同じ？ ・えっ！これも江戸時代から？ ・江戸時代は武士が一番？	<ul style="list-style-type: none"> <li>・調べ学習が苦手な生徒に配慮する。 ○課題の準備 ○資料の準備 ○追究の助言</li> <li>・調べに重点を置き、まとめの負担を軽くするように、簡単にまとめられるワークシートを準備する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒による主体的な調べ学習（課題選択・多様な調べ方、2時間）を実施する。 →観察、作品分析</li> </ul>
6	「調べ学習発表会」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各自机の上に作品を置き、全員の作品を自由に見て回れるようにする。</li> <li>・付箋紙を持たせ、相互評価に利用させる。</li> <li>・他者の作品の中からカルタに使える情報をさがさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・作品発表会および相互評価を実施し、互いに認め合える場とする。 →観察、作品分析</li> </ul>
7	「大江戸カルタを作ろう」 ・カルタ作成  単元のまとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本単元の学習の成果として一人一人カルタおよび候補作品リストを作成する。</li> <li>・生徒作品のカルタを利用して、教師が単元のまとめをする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・単元を通したテーマ「大江戸カルタを作ろう」の作成 →観察、作品分析</li> </ul>

## (2)「鎖国」の授業構成<sup>※6</sup>

この授業では、鎖国期のいわゆる四つの口について確認した後、そのうちの一つである朝鮮通信使について、さまざまな史料からそのねらいを読みとり、鎖国期の日本について理解を深める。学ぶ楽しさを実感させるために次のことに留意して授業を構成した。

- ①授業の最初に、鎖国に関する生徒の既得の知識にゆさぶりをかけ、学習意欲、追究意欲を喚起する。
- ②身近な地域の歴史遺産・日光東照宮を活用し、学習意欲を喚起する。
- ③歴史上の人物として雨森芳洲を登場させ、学習意欲を喚起する。
- ④本時の中心教材である朝鮮通信使について重層的に理解させ、「分かった」楽しさを味わわせる。

①について。事前の調査から、ほぼ全員の生徒は「清とオランダを相手に長崎の出島のみで交易をしていた」という鎖国像をもっていることが分かった。この既得の知識に対して、資料「江戸時代の主な交通路」から、当時の航路が朝鮮や琉球に延びていることに気づかせ、自分のもっている知識では説明がつかないことに気づかせる。また、「オランダはヨーロッパの品物を運んでいたのではない」という情報を提示し、鎖国についての自分の知識の不十分さに気づかせ、追究意欲を喚起したい。

②について。朝鮮通信使が日光を訪れていることを知らせ、本時の主な学習対象である朝鮮通信使と生徒との関連に気づかせ、朝鮮通信使について追究する意欲を持たせたい。

③について。以前の実態調査から、歴史学習の中で楽しいときは人物学習であると生徒は感じている。この理由は、人物の登場により歴史学習にドラマ性が生まれ、語句や抽象的な概念のみ学習する無機的な授業にならないからである。朝鮮と日本の交流に大きな役割を果たした雨森芳洲や申叔舟などの人物を授業に登場させ、朝鮮通信使に携わった人の思いにふれさせ、関心を高めたい。

④について。「江戸時代には朝鮮通信使が日本にやってきた」「両国は友好関係にあった」という表層的な歴史事象の理解にとどめず、朝鮮通信使について重層的に理解させたい。重層的とは、表層的な事実の下にある、「江戸幕府の思惑」「朝鮮の思惑」等を理解した上で表層的な事実を理解させることである。これにより、生徒は当時の時代像をより正確に描けると考えた。そのために、本授業では民間の交流、東アジアの情勢、両国が乗り越えた困難、友好関係のために尽力した人物の存在等の事実から日・朝それぞれの朝鮮通信使のねらいを考えさせる。生徒にとってかなり難しい追究課題であることが予想されるので、①～③によって十分に追究意欲を高める必要がある。

資料 「鎖国」の授業展開

※太字は学ぶ楽しさを実感させるための手だてを表す。

学 習 活 動	資 料	指導上の留意点
1 鎖国について知っていることを発表する。	・白地図 (東・東南アジア) ・ワークシート	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の描いた「鎖国のイメージ」(事前調査)を活用する。</li> <li>・長崎・出島での清とオランダとの貿易を確認する。</li> <li>・オランダ商船は主にアジアの物産を扱っていたことを知らせる。</li> <li>・鎖国にいたる経緯とそのねらいを確認する。</li> </ul>
2 「江戸時代の交通路」を見て、海外に航路が続いていることから清、オランダ以外との関係に気づく。	・江戸時代の交通路 (資料集 p.125)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・清とオランダ以外に、アイヌや朝鮮、琉球と交流・交易していたことに気づかせる。</li> </ul>
3 教師の説明を聞きながら、鎖国期の対外交易・交流についてワークシートの地図にまとめる。	・ワークシート	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「四つの口」を確認する。</li> <li>・「鎖国」の語源について説明する。</li> </ul>
4 資料を見ながら朝鮮通信使に関する教師の説明を聞く。 (1) 交流の様子 ・朝鮮通信使のあらまし ・貿易の様子 ・丁重なもてなし ・日光東照宮の進物 ・民衆交流 ・現在に残る工芸品や伝統行事 (2) 日朝間の緊張 ・通信使刺殺事件 ・雨森芳州と申叔舟の口論	<ul style="list-style-type: none"> <li>・朝鮮通信使図</li> <li>・朝鮮通信使行路</li> <li>・朝鮮通信使一覧</li> <li>・貿易の様子</li> <li>・通信使の食事写真</li> <li>・日光東照宮写真</li> <li>・「馬上揮毫図」</li> <li>・通信使人形写真</li> <li>・牛窓唐子踊り写真</li> <li>・文書資料 「崔天宗殺害事件」 「倭!唐!」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教師が本時の教材研究を進めた手順、思考過程にふれさせ、学び方の学習を意識させる。</li> <li>・(1)から友好関係が築かれたことを知る。また、民衆交流がさかに行われたことに注目させる。</li> <li>・日光東照宮にも朝鮮通信使が訪問し、今日も進物が見られることを知らせる。</li> <li>・(2)から、(1)の友好関係が易々と構築されたものでないことに気づかせる。</li> <li>・雨森芳州の業績に簡単にふれる。</li> </ul>
5 朝鮮通信使のねらいを、それぞれの国の立場から考える。	・ワークシート	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の推論を生かし、問答をしながら授業を進める。</li> <li>・これまでの資料から考えさせるとともに、次の視点から考えてみるように助言する。 →年表で、通信使が行われる以前の両国の歴史(秀吉の朝鮮出兵)に着目して考える。 →視野を広げて、当時の東アジア情勢から考える。</li> </ul>
6 学習から生まれた新たな疑問を記入する。	・ワークシート	<ul style="list-style-type: none"> <li>・数名の生徒に発表させる。疑問が十分に発表されない場合、教師がいくつか発表する。</li> </ul>
7 大江戸カルタの候補作品を記入する。	・「大江戸カルタ」	

#### 4 「鎖国」の授業の分析から

##### (1) 授業後の生徒アンケートの結果から

授業終了直後に、本校共同研究会授業改善部が作成したアンケートを生徒全員に実施したところ、次のようなことが明らかになった。(紙面の都合でアンケート用紙については掲載しない。)

- 「今日の授業は楽しかった」と回答した生徒が 100 % だった。
- 鎖国のイメージが変わった生徒が全体の 90 % 以上だった。
- 「鎖国のイメージを変えた教材・情報」として次の選択肢が 50 % 以上の生徒に選ばれた。
  - ・オランダ商船は主にアジアの物産を扱っていたということを知ったこと  
.....62 %
  - ・「江戸時代の交通路」を見たこと.....57 %
  - ・「四つの口」を確認したこと.....78 %
- 「鎖国のイメージを変えた教材・情報」として次の選択肢があまり選択されなかった。
  - ・長崎・出島での清とオランダとの貿易を確認したこと.....18 %
  - ・鎖国に至る経緯とそのねらいを確認したこと.....43 %
- 「朝鮮通信使のねらいについてそれぞれの国の立場から意欲的に考えることができた」と回答した生徒が 100 % だった。
- 教師が用意した朝鮮通信使に関する資料のうち、興味をひかれたもの(二つ)として次の選択肢が 50 % 以上の生徒に選ばれた。
  - ・朝鮮通信使の様子やもてなしの様子を知ったこと.....59 %
  - ・日光東照宮にも朝鮮通信使が訪れ、今日でも進物が見られることを知ったこと  
.....51 %
  - ・日本と朝鮮との緊張関係があったことを知ったこと.....51 %

以上の結果から、第1に楽しく授業に取り組んでいたこと、第2にかなり難しいと思われる追究活動(朝鮮通信使のねらいを幕府と朝鮮それぞれの立場から考える)にも意欲的に取り組んでいたこと、第3に鎖国についての理解が深まったことが分かった。さらに、「鎖国のイメージを変えた教材・情報」として『江戸時代の交通路』を見たこと「オランダ商船は主にアジアの物産を扱っていたということを知ったこと」が多くの生徒に選択された。これらの教材・情報は、本時における授業当初の生徒へのゆさぶり(「えっ! オランダと中国だけじゃなかったの! オランダ船はヨーロッパの物産を運んでいたんじゃないの! 今までそうだとは思っていなかった!」)として意図したものである。

また、朝鮮通信使に関する資料のうち興味をもったものとして、「日光東照宮にも朝鮮通信使が訪れ、今日でも進物が見られることを知ったこと」が選択されていることから、身近な地域の歴史を利用することが効果的であることも確認できた。

## (2) 生徒の作品から

生徒は学習後に「授業から考えたこと・授業の感想」として次のように書いている。

- ①今までよく分からなかったことが理由まで明確に知ることができた。日本と朝鮮のことなのに他の国まで関わっていることに驚いた。
- ②今日の授業で新しく分かったことがたくさんあった。
- ③鎖国のことはあまり知らなかったけど、今日の授業でとても深く知った。
- ④一つ一つのできごとには奥深く、たくさんの意味が込められていてすごいと思った。
- ⑤ねらいを考えるのがとても難しかったが、知らないことばかりで勉強になった。
- ⑥朝鮮については分かったが、なぜオランダと中国と貿易をしていたのか。
- ⑦もっと朝鮮通信使についてくわしく知りたいと思った。
- ⑧パソコンを使っていて、画面が大きくて分かりやすかった。

書かれていた内容は主に五つに分けられる。①や②のように新しく知ったことがあったことを書いたもの、③や④は少数だったが「深く」という語が含まれているもの、⑤のように、追究活動（朝鮮通信使のねらいを幕府と朝鮮それぞれの立場から考える）の難しさについて書いたもの、⑥や⑦のように新たに生まれた疑問を書いたもの、⑧のように指導方法の良かった点やわかりやすさを指摘したもの、である。

「大江戸カルタ」には次のような作品が見られた。

### [鎖国に関するもの]

- ・鎖国中も 意外と貿易 しているよ
- ・銀を輸出し 絹を輸入していた 江戸時代
- ・四つの口が開いていた江戸時代

### [朝鮮通信使に関するもの]

- ・いい関係 築くために 頑張ります 通信使と 幕府とで
- ・サインくれ！ ファンが群がる 通信使
- ・朝鮮は 通信使おくり 一安心
- ・対馬藩 貿易なしでは 生きられない

ほとんどの生徒が鎖国について新しく知った知識や朝鮮通信使に関する知識をカルタの候補作品として書いており、その比率は単元内の他の授業に関するものよりかなり多い。学習以前の関心の高さは同様だったことから、授業の工夫が効果的であったと考えられる。

## (3) ゆさぶりに関する考察

以上のことから、生徒の既得の知識に対するゆさぶりが授業に与えた影響として次の3点が考えられる。

第1に、既得の知識に対するゆさぶりから、生徒は新しい知識を獲得し、鎖国についてより深い理解ができた。それによって生徒は、「今日の授業では新しい知識を獲得できた」と感じ、授業に満足したと考えられる。より深い理解ができたこと、すなわち歴史事象の



背景や根底にある人々の心情を理解できたことに生徒は満足を感じたのではないか。歴史の事実がただやみくもに暗記するものではなく、背景のある、実に面白い事実として受け止められたのではないだろうか。ゆさぶりが知識の獲得にどのような影響を与えたかは断定できないが、授業への関心を高めたと推測できる。

第2に、ゆさぶりは朝鮮通信使の学習に対する追究意欲の喚起・持続にも良い効果があったと考えられる。ゆさぶり以外にも指導方法の工夫（大画面モニターによる教材提示や朝鮮通信使にかかわる多くの資料、エピソードの提供など）や授業者と生徒の関係等も影響していると考えられるが、ゆさぶりが大きな影響を与えていたことは、ゆさぶりの場面での生徒の意欲の高さや「授業から考えたこと・授業の感想」から明らかである。その結果、生徒にとって難しいと思われる課題も追究できたのではないか。

第3に、ゆさぶりをうけた生徒は、一斉授業であっても主体的に思考していたことである。新たな疑問を発見できるということは、生徒が主体的に教師の説明を聞き、自分なりに理解しようとしていることを表している。教師の話を自分自身で理解しようとしていなければ（教師の説明を受動的に聞いて、板書しているだけでは）疑問は生じない。事前調査の結果から、朝鮮通信使については既得の知識もほとんどなく、生徒にとって関心のある学習対象ではなかったはずである。しかし、その授業から新たな疑問を生じたのである。新たな疑問を記入した生徒は社会科が得意な生徒ばかりではない。新たな疑問をもったことを学習対象に対する関心が生まれたことととらえるならば、このことの意味は大きい。なぜならば、歴史が好きな生徒のほとんどは、特定の人物や時代が好きなのである。ゆさぶりによって新たな疑問が生まれ、これまで関心のなかった歴史事象にも関心がもてるようになれば、より一層歴史に関心をもつ生徒を増加させることができるからである。

## 5 まとめ

生徒の既得の知識をゆさぶること、ゆさぶりに利用した教材が、第1に、より深まりのある知識を獲得させる点で、第2に、追究意欲を生じさせ、持続させる点で、第3に、歴史の学びの楽しさを感じさせ、主体的な学習を促す点で有効であることが検証できた。歴史の授業を楽しくし、ひいては歴史に対する関心を高めるためには、教師が綿密な実態調査と教材研究によって生徒の既存の知識をゆさぶれるように準備することが一つの手段となることが再確認できた。

小学校の学習の焼き直しになってしまうような中学校社会科の授業や、活動はあるものの、学習が終わった後、確かに友達と楽しく活動はしたが、何を学習したのか分からない授業では、「歴史好き」を「歴史授業嫌い」にしかねない。

活動がいけない、知識を増やすことが大切だと言いたいのではない。ダイレクトに学び方を学習する授業にも意義があるだろう。しかし、生徒の求めているものが知識であるならば、知識を獲得する喜びを感じさせ、まず歴史の学習そのもののおもしろさに気づかせることが結局は生徒の主体的な学習を生み、学び方の習得等にも良い影響を与えるはずである。現に、傍目には一斉授業で、生徒の主体的な活動時間が十分に確保されていない今回の「鎖国」の授業でも、生徒は教師が提示した教材から思考し、さらには分かったおもしろさが他の疑問を生じさせたのである。

今後、授業に真剣に取り組むための学習意欲を育成することはもちろん必要だが、それ

にとどまらず、授業外でも生きる関心・意欲を育成することが求められるといえる。社会科で育成すべき関心・意欲は、授業にとどまるものではない。むしろ授業以外でどのように作用するか、すなわち、授業以外の場面で社会事象に関する知識を得、思考しようとするか否かにかかってくるからである。

注

- 1 宇都宮大学教育学部附属中学校「『確かな学力』を身に付けさせる学習指導の在り方－学ぶ楽しさを実感できる授業への改善を通して－(第47回公開研究発表会発表要項)」2002年 p.26－27。
- 2 小原友行「社会認識形成の『論理』と『心理』－社会科授業構成の原理を求めて－」社会系教科教育研究会編『社会系教科教育の理論と実践』清水書院 1995年 p.10－21。
- 3 岩田一彦『社会科固有の授業理論』明治図書 2001年 p.129－130。
- 4 石川洋一「社会科を学ぶ楽しさに関する考察」宇都宮大学教育学部附属中学校『研究論集第50集』2001年 p.38-39。
- 5 竹田清夫「指導要録における『関心・態度』評価の実態」日本教育方法学会『教育方法学研究』第17巻 1991年 pp.77－85。
- 6 この「鎖国」の授業を構想するにあたって、すぐれた先行実践として、佐伯真人氏の「鎖国」の授業、釜田聡氏の「通信使」の授業を参考にした。